

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所について 新聞に掲載されました

毎日新聞夕刊（全国版）に不定期連載されている「新20世紀遺跡」に、2月27日付で「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所跡」が掲載されました。

この連載記事は、我が国の産業遺跡や軍事遺跡、文化遺跡や遺構などを紹介し既に100回ほど続いており、今回は学園の前身である満蒙開拓幹部訓練所、満蒙開拓指導員養成所について取材依頼がありました。

2月13日に学園内や、JR内原駅傍の「水戸市内原郷土史義勇軍資料館」で取材が行われ、西村典夫名誉教授(91歳)がインタビューを受けた内容を中心に紹介されています。



[クリック!](#)

※ 続編は3月30日に掲載されました。

新 20世紀遺跡

72

水戸市

満蒙開拓青少年 義勇軍訓練所跡

田

「満蒙開拓青少年義勇軍」の内原訓練所跡(水戸市内原町)近くには「渡満道路」という桜並木がある。訓練所を築立つ若者たちが植民地・旧満州(現中国東北部)に渡るべく、最寄りの内原駅に向かうため歩いた道だ。陽光の下、記者がここをたどりながら思い出したのは、画家・宮崎静夫さん(1927~2015年)のことだった。

描き続けた2万4000の無念



▲内原訓練所跡近くに残る「渡満道路」(水戸市で、画家の宮崎静夫さん「死者のために」シリーズで亡くなった満蒙開拓青少年義勇軍の仲間や、抑留で倒れた人々をモチーフにした。後ろは同シリーズの「友よ」東京都千代田区で2013年3月20日)

翌年3月、学校の卒業式を待たずに内原訓練所に入所した。15歳。結局、学校からは唯一の参加だった。卒業証書とは別に表彰状が贈られた。教育は行政の一部である。為政者が国策を間違えると、学校も教師も間違えることにつながる。義勇軍はその一例だ。

このころ、義勇軍の訓練は内地でおおむね3カ月。移民先の満州では「満蒙開拓義勇軍」として3年近く

の訓練を積んで定住し、村づくりに入ることになってた。『満蒙開拓と青少年』宮崎さんも苦手な肉料理とシラミに悩まされた。

42年6月、満州東北部の海倫県に入った。冬の想像を絶する寒さと粗食で、少年たちの心はずきみ、「おれを殺して食べただけで、殴り殺された仲間もいました。その少年は15歳で、いっただい人の鎮魂が大きなテーマになった。

訓練を積んで定住し、村づくりに入ることになってた。『満蒙開拓と青少年』宮崎さんも苦手な肉料理とシラミに悩まされた。42年6月、満州東北部の海倫県に入った。冬の想像を絶する寒さと粗食で、少年たちの心はずきみ、「おれを殺して食べただけで、殴り殺された仲間もいました。その少年は15歳で、いっただい人の鎮魂が大きなテーマになった。

訓練を受けるのは言ち盛り、遊び盛りの子どもたちだ。つらさに耐えかねたのか「脱走を繰り返して、いなくなつた者もいました」。

宮崎さんは45年春、17歳で兵役を志願し現地で陸軍に入った。3カ月後に敗戦。ソ連によりシベリアに抑留された。仲間が次々と倒れる中、重労働と飢え、極寒の三重苦に耐えた。だが49年2月、ソ連の政治部特校から呼び出されて「ファシストの先兵である義勇軍の一員だった」などと書められた。さらにつらかったのは、それまで仲間だった者が「裏切り者！」と指弾されたことだった。同年秋に帰国。画家となり、死んでいった人たちの鎮魂が大きなテーマになった。

水戸市内原郷土中義勇軍資料館(同市内原町)は、訓練所や満州での生活などを今に伝える。訓練所からは8万6530人もの若者が海を渡り、およそ2万4000人が帰らなかった。生きていけば、それぞれの分野で活躍していただろう。資料を見ながら、国策に翻弄されて亡くなった若者たちのことを思った。

【栗原俊雄、写真も】

[クリック!](#)

令和2年3月18日

令和2年3月31日

文責：石塚